

スポンの後ろのポケットには

朝日ジャーナルを突っ込んでい

たものである。朝日ジャーナル

は硬い内容で知られる雑誌であ

った。正月になると故郷に帰れ

る人は帰り、宿舎にはいろいろな

な事情で帰れない人が残った。

4、5人で車座になって、する

めをつまみに冷酒を飲む。あま

り人の境遇を詮索しないのがル

ールであった。当たらず触らず

の会話である。

テレビでは鶴田浩二の「傷

だらけの人生」が流行っていた。

わたしは加藤登紀子の「ひと

り寝の子守唄」と森繁久弥の「知

床旅情」が好きだった。「ひと

りで寝るときはよう」。この歌

にまつわる加藤登紀子の哀愁

は時代の調べであった。寅さん

は言う。「おまえ、さしずめイ

ダブった。

大学を中退したというだけで

も故郷は帰りづらいつころであ

った。演劇を始めたこと知った母

が激怒しているらしかった。実

家の近所のおばさんと電話で話

したことがある。あれは、どう

して電話で話す状況になったの

からんこたる演劇はしよると

や」と、これまた激怒したので

ある。母は近所のおばさんの挑

発に乗ったのである。母は「難

しいことは母にはわからない」

とわたしがいったと解釈したの

である。確かに、大衆演劇では

ない演劇は母には難しいのかも

始めた。小柄な痩せた筋肉質の

老人が故郷の家自慢を始めた

のである。「俺はこんなこと

をしているが、故郷の実家は

村で一、二を争う豪勢な家だ。

いまは兄貴が継いでいて面倒

くさいから帰らないが、帰って

来い帰って来いとうるさくてか

なわん」。わたしはこの小柄

な老人の田舎自慢が哀れだっ

た。「ああ、俺はなぜ故郷を

振り返ろうとしなかったんだ」。

「知床旅情」を歌いながら、そ

う考えた。

そして「倭人伝」を書いた。

小柄な老人のひと言が書かした

のである。いま、11月の新宿紀

伊國屋ホール公演「追憶―七人

の女詐欺師―」を執筆し、準備

中である。(松浦市出身)

電話口 激怒した母

ンテリだな」。「知床旅情」は

映画で見た。暇つぶしに偶然

に入った新宿の映画館であっ

た。詳しい内容は忘れたが、

森繁扮する知床の老人が一升瓶

を抱えて歌う「知床旅情」は

切なかつた。なんとなく帰れな

い故郷松浦の父とイメージが

かは忘れた。ただ「どげん演劇

ばしよると。お母さんには説明

した」と質問され「さあ、お

ふくろにはわからんじやろ」と

しゃべった覚えがある。そのお

ばさんはそのまま母にしゃべっ

たらしい。

別の電話で母は「わたしにわ

しれない。母というよりは一般

の人にはである。昼、汗水流し

て働いて、夜、難しい演劇を見

させられてはかなわぬ。」「新

劇はインテリが見る演劇」とい

った人もいる。

宿舎で茶わん酒を飲みなが

ら、小柄な老人が故郷自慢を